

——東京都、調布市の某所に、その店はある。

近所に住む者たちでさえ、ともすれば見過ごしかねない、町角の隙間の中に。その古いラーメン屋は、いつの頃からか、ひそやかに佇んでいる……。

そのラーメン屋を訪れる者は——例外なく、ある種の「懐かしさ」を感じるだろう。

温かみのある書体で店名を記した、古い暖簾のれん。さほど広すぎず、明るすぎず、清潔すぎもしない、昭和のほど良い雑然さをそのまま残したような、店内の佇まい……いや。その店が「懐かしい」のは、古い店構えのせいだけではない。

店内に満ちた空気が懐かしい。ラーメンから立ち昇る、湯気の香りが懐かしい……チャシューを一切れ、さりげなくおまけしてくれる、店主らしき老婆の優しさが懐かしい。カウンターの井ふを拭いている、男達の逞たくましさが懐かしい。そして——その店に集まってくる、異様な風体の客達の明るい笑い声が、何よりも懐かしい……。

優しさ。逞しさ。笑い声。——この都会まちの日常が失ってしまった、「懐かしい」もの。……それを愛おしく思えるのならば、あなたは必ず、その店に歓迎されるはずだ。

「懐かしい」感覚に満ちた空間で、初対面なのに「懐かしい」人々と親しく語り合い、いつしか肩を組んで歌いながら——TOKYOの日常で傷ついた心が癒されていくのを、あなたは確かに感じるだろう。そして、いつの日か——あなたは、驚くべきものを目にすることに違いない。

……夜の闇の中に。白昼の死角の中で……我々を見守り、人知れず救ってくれている、異形の友人達が存在している事実を、あなたははっきりと知るだろう。

それを知るのは、怖ろしいことではない。彼等オンスケは、忌まわしい存在では決してない……。

「また、おいで——」

異形の友人達はそう言って、あなたを送り出してくれるはずだ。……彼等の声を背に、懐かしい思いに心を温かく浸されて、あなたは家路につくだろう。

ただし——現世うつしよと異界を隔てる規のりは、厳然として存在する。

……あなたが家に辿り着いたとき。あの店と、そこで見た友人達のことを、覚えているとは限らない——。

夜の街に、歌声が響いている。

現代いまでは珍しい、機械カラオケを通さない、自然な歌声が……。

オーンジャ オーンジャ 歌宴うたうたげ 仲間が集まりや

オーンジャ オーンジャ 歌宴 心も晴れよう

オーンジャ オーンジャ 歌宴 仲間が集まりや

オーンジャ オーンジャ 歌宴 心も晴れよう……

今宵——ラーメン屋「だいちゃん」では、オンバケ達の「宴」が催されていた。

「兜」のタイヘイ。「鷹」のハシタカ。「犬」のトモスケ。……紅い薄物を身に纏い、ウクレレを爪弾いている妖艶な美女は、「金魚」のイケチヨだ。カウンターの中、寸胴鍋をかき混ぜながら微笑んでいる老婆は、関東オンバケの纏め役、「御釜」のおタキだ。……仮初めの人間態をとった精霊達は、軽い酔いに頬を染めながら、共に手を打ち、楽器を鳴らし、声を合わせて、その歌を繰返し歌い続ける……。

オーンジャ オーンジャ 歌宴 仲間が集まりや

オーンジャ オーンジャ 歌宴 心も晴れよう……

ハワ、ハワ、ハワワン、ハワワンコー

ハワ、ハワ、ハワワン、ハワワンコー……

……メンマをのせた小皿の上、フワフワとハミングしながら、小さな身体を揺すつていく土偶の小妖精を、白い指先に愛でながら——カノンもまた、オンバケ達の歌声に、身を委ねていた。……幾度となく反復される同じフレーズが、繰返し打ち寄せる波のように、疲れた心を優しく洗ってくれるのを、微かに感じながら……。

オーンジャ オーンジャ 歌宴 仲間が集まりや

オーンジャ オーンジャ 歌宴 心も晴れよう……歌宴……歌宴……

「歌」とは本来、こういうものだったのかもしれない——カウンターに頬杖をついたまま、リズムに合わせて身を揺らしながら、カノンはふと、そう思う。

理屈や技巧などなく、ただ、心のおもむくままに発した声が、詞が、聴く者の心とそのまま共振するために——「歌」とは、ただひたすら繰り返される「祈り」のようなものだったのかもしれない。

「祈り」——そう考えたとき、カノンの胸中に、再びあの暗い影がさした。……幸太郎。

〇〇。「To The Top」……そして、「いのりうた」。今のカノンには歌えない、あの懐かしい歌……。

「……………」

自分は今もう、「いのりうた」を歌えない。

幸太郎が盗んでいったのは、「いのりうた」のメロディだけではない。

愛した男の裏切りと、TOKYOの日常によって、自分が永遠に失くしてしまったもの。

「いのりうた」に何よりも必要なもの……それは……  
「心からの、折り」――。

オーンジャ オーンジャ 歌宴 仲間が集まりや  
オーンジャ オーンジャ 歌宴 心も晴れ……

「――オンバケは皆、歌が好きだよね」  
「え。ええ……」

突然話しかけられて戸惑いながら、カノンは振り向いた――すぐ隣の席で、銀縁の眼鏡をかけた背の高い青年が、静かに微笑んでいる。

青年の名は、若松。カノンと同じく、オンバケ達の存在を知る、数少ない人物の一人である……若松青年は、カノンの隣でソーダハイのグラスを傾けながら、もう一度、おずおずと呟く。

「オンバケは皆、歌が好きだよね――巫崎さん」  
「そうですね……」

ただ一言答えたカノンに向けて、若松は嬉しそうに頷いた。

オーンジャ オーンジャ 歌宴 仲間が集まりや  
オーンジャ オーンジャ 歌宴 心も晴れよう……

いつの間にか、オンバケ達の合唱に合わせて、ブルースハープの伴奏が重ねられている。静かで明るいその音色に励まされるかのように、若松は言葉を繋いだ。

「……最初にオンバケ達の存在を知ったときは……僕も、驚いた。……これは一体何なんだろう……科学的に、どう説明したらいいんだろう、って……」

「……若松さん、科学者みたいな言い方なさるんですね」

茶化すつもりなどなく、答えを返したカノンの側、若松青年は苦笑しながら頭を掻いた。  
「言ってなかったっけ？ 僕はこれでも、科学者の端くれだよ。生物学部の院生なんだ」

「あ――ごめんなさい。そういうつもりじゃ……」

「いやア、科学者っぽく見えないのも無理はないかな？ ……我ながら、ビミョーな研究テーマだから……まあ、その……」

「若松さん、どんな研究をなさってるんですか？」

カノンの問い掛けを受けたその途端、まるで電源をつながれでもしたように、若松は顔全体を輝かせた。

「うん。僕が研究してるのは、大脳心理学――その中でも、象徴概念の発生・発達プロセス

スをテーマにしている……」

「シヨウチヨウガイネン……ですか？」

「そう。サルに簡単な道具の使い方を覚えさせて、体性感覚野の活動を計測するんだ。実に興味深いデータが採れてるよ。……象徴概念の発生だけじゃない。この研究は、オンバケ達の存在を科学的に検証することにつながるかも……」

「タイセイ……カンカクヤ？……シヨウチヨウガイ……？」

「——若松、それじゃあ駄目だ——」

初めて聞く単語の意味を理解できずに戸惑うカノンのすぐ側で、クールな呆れ声あきがした。ブチンコが横たわる小皿の陰から、小さな手足の生えたブルースハープが——今一人の小妖精、フクマツが立ち上がり、和音で溜息をつく。

「若松、お前の言葉はいつだって難しすぎる……ご婦人を口説くなら、もっとロマンチックにやるんだな」

「ちよっ……ちよっと、フクマツさん——！」

「やだ、そんな……」

オンバケ達が合唱を止めて、どっと笑い声を上げた。

「がんばれエ、若松さん！」

「私達のことは気にせずに、続けて続けて」

「人間様をからかうんじゃないよ、この罰当たりどもが！」

「……ああ……その……」

顔を真っ赤に染めながら、若松は、カノンに向けて、たどたどしく言葉を繋ぎ始める——

「……ええ、つまり、『このころ』の成り立ちに関する研究さ。オンバケは、『人のこのころ』と密接な関係にあるんじゃないか——僕はそう、思うんだ」

『「このころ」と「オンバケ」……』

若松青年は、頷いた。

「——熟練した職人や楽器演奏者が、こんなことを言うのを聞いたことはないかい？……使い慣れた道具や楽器は、単なるモノじゃない。身体の一部だ。自分の手を通して、道具や楽器に神経が通っているようにさえ感じられる……って」

「あ——聞いたことがあります、それ」  
カノンは思わず頷きながら、高校時代、軽音楽部で出会った先輩のことを思い出していた。

『ヴァイオリン  
「カオリはもう、私と一心同体なの——」』

……愛用のヴァイオリンに名前をつけて、まるで我が子を抱くように愛でていたその先輩は、正にそう言いながら、卒業後も精進を続け——今では、海外の高名なオーケストラ

で、首席奏者コンサートマスターを務めているという……。彼女のことを思い出しながら、カノンはもう一度頷いた。

「——なんだか、上手い人には、そう感じられるみたいですよ。自分と楽器が融合して  
るみたい……」

「感じられるだけじゃない。それは、事実なんだ——本当に、道具と人間は、一つになれるんだ」

「え？」

若松は、驚くカノンの目の前、グラスを持った手を掲げて見せた。

「脳波を分析してみると、分かるんだ。……道具を使っている最中、人間の身体イメージは明らかに拡張している。脳神経は、肉体の範囲を超えて——手の中の道具を、自分の一部として認識している。道具と人間は、文字通り一つになるんだよ」

「……………」

「サルを使った実験でも、結果は同じだ。道具を使うことで、脳の活動は変化する。道具を——『自分でないもの』を『自分の一部』として意識するように——そう、人の『ころ』はそうして生まれたのかもしれない……人の『ころ』が道具によって育はぐまれたものだとしたら……道具にもまた、『ころ』が宿ることがあるのかもしれない……」

「……道具に——心が……」

——いつの間にか、二人の周囲を、緩やかで温かいメロディが流れている。カウンターの上、ブルースハープのオンバケ・フクマツが、そしらぬふりで、編曲された「歌宴」を奏でていた。

兜の化身、タイヘイ。古い御釜が転生した、オタキ……フクマツの調べを聴きながら、カノンはふと、幼い頃に祖母から聞いた昔話を思い出した。——人に愛され、大切にされた道具は、長い歳月を経て、霊的な存在に転生する——。

——ツクモガミ——カノンの呟きに、若松は大きく頷いた。

「そうなんだ！ これこそが、古来の『九十九神つくもがみ』かもしれない！ 人の『ころ』と道具との密接な関連——これこそが、オンバケを科学的に解明する仮説になりうるかもしれない。だとしたら、巫崎さん……」

「……………」

カノンは、沈黙したまま応えない。若松は、銀縁眼鏡の奥の瞳ひとみをキラキラさせながら、一人熱っぽく語り続けていたが——不意に、済まなそうに肩を落とし、目を伏せた。

「……あ、ごめん。僕一人で勝手に話しちゃって……こんな話、退屈だったよね。つい……」

「いえ、そんなつもりじゃ……続けてください、若松さん」

「え？」

「若松さん、楽しそうだから。一生懸命に話してる若松さんは、まるで……大好きな歌を歌っているときみたいな表情で——素敵です」

「巫崎さん……」

ほんの少し、恥ずかしげに微笑みながら、カノン は答えた。

「科学のお話は、よく分からないけれど、そう思っただんです。……歌と科学は違うものだけれど、どちらも、他人に何かを伝えようとする……心から伝えたいものがあれば、それは素敵な歌になるんだなって……そう思っただんです」

「科学が……歌に……」

若松の顔に、喜びと驚きが絢交ぜになった、複雑な表情が浮かぶ——その刹那に思いついた何かを急いで書き留めるかのように、カノンと見つめ合ったまま、若松は呟いた。

「科学と歌……いや、人間にとって『歌』が『言語』に先行するものだとしたら……だとしたら……」

「——若松さん？」

「そうだ——『ころ』は『歌』より生じたものかもしれない。『歌』と『道具』によって生まれる『ころ』——オンバケ達が歌を愛するのは、そういう理由かも……？　すごい、すごいよ、巫崎さん！　これは新しい仮説だ！　『ころ』と『歌』と『道具』……人の意識と、オンバケの発生を説明できるかもしれない、斬新な仮説だよ！　すごいよ、ありがとう、巫崎さん！　ありがとう！」

「ええ——？　何だかよく分からないけど、研究のお役に立てたんだったら嬉しいですよ！　良かったですね！　私も嬉しいですよ、若松さん！」

「ありがとう！　巫崎さん、ありがとう——！」

……カウンターで、手を取り合わんばかりに喜び合う二人の背後、酔いに頬を染めたトモスケが、ボツリと呟いた——。

「『ころ』と『歌』と『道具』……でも、おかしいツスねえ……オンバケは、道具から生まれた奴等ばかりじゃありませんから……現に、俺、『犬』ツスよ」

——ワン、と一声鳴いて、トモスケはオンバケ体に転身した。「犬」の象徴と化した頭部から赤い舌を突き出したまま、不思議そうに首を傾げてみせる。

「まあ、そうだよね。妾だって『金魚』だし……ハシタカは『鷹』だしねえ。道具じゃないよ」

「そうですね、イケチヨ姐さん」

——二人の女性は同時に身を震わせ、「鷹」と「金魚」に化身した。「金魚」のオンバケ。イケチヨは、大胆に開いた胸元の前、白い腕を組み、呆れた声で言い放つ。

「その話、無理があるんじゃないかねえ……若松さん」

「そんな……イケチヨさん」

気弱な声で言い返そうとしたカノンを遮るように、オタキがハァーッと長い溜息を吐いて、「御釜」の象徴に姿を変え、済まなそうに呟いた。

「私や長年オンバケやってて、色んな奴等を見てきてるけどね。……石灯籠が生まれ変わった奴。薬缶とか、刀とか、金庫とか、若いとこじゃあテレビのオンバケとか……」

「皆、道具ですよ。若松さんの言ったとおり……」

「でもねえ……」

古い御釜の化身は、もう一度溜息をつく。

「やっぱ、それだけじゃないんだよ……。『蠅螂』のキリノハに、『鋏形虫』のユウスケ。

……虫だけじゃないよ。『獅子』のリョウマ。『大亀』のウミキチ……犬もいれば猫もいる。

鳥も魚も、木や花もいる……。正直、オンバケってのは何でもありなのさ。皆に共通してるのは、『人間様に愛され、大切にされた』ってことだけ……オンバケってのは、それだけのモンなんだよ」

「……それだけの……」

諭すように言われて、若松はがっくりと肩を落とした。

「良い仮説だと思っただのに……やっぱダメ、か……」

「そんな……ダメじゃありません！ 若松さんの仮説、ダメじゃないですから！ 元気だして下さい、若松さん！」

「……ハァ……」

ブチンコが全身で溜息をつくのと同時、化身した姿のまま、オンバケ達が爆笑した。

「若松、お前って奴は……」

「慰めてもらえて良かったね、若松さん」

「励ますつもりが、逆に励まされてちや世話ないッス」

「ええッ、だから、いくら面白くても、人間様をからかうんじゃないってば！」

笑い続けるオンバケ達の中から不意に、ギターを掴んだタイヘイが立ち上がった。――

歌と酒に酔ったのだろう。緩んだ頬が、赤く染まっている……。

「何、難しい話してっぺよオ！ 人様の恩を受けたものに心が宿るのは、当たり前のことだっぺ！ ……歌が心を動かすのも、当たり前のことだっぺ、ナァ！」

大声で言うなり、タイヘイは身を震わせて、オンバケ体に化身した。

「オラあ、タイヘイ！ 千草十郎時貞様に可愛がられて生まれた、兜のタイヘイだ！ オラだけじゃねえ。ブチンコもフクマツも、オタキさんも……オンバケは皆、人間様に愛されたから、こうして生きてんだべ、若松さん！ こうして楽しく歌ってんだべ、カノンちゃん！」

「タイヘイさん……」

兜の化身はその姿のまま、ギターをかき鳴らし、酔いに緩んだ声を張り上げる――。